

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

校内研修 第2号

- 小, 中学校対象 -

平成16年10月発行

教育実践に生きる校内研修の進め方(2)

第1434号においては、それぞれの教職員がこれまで以上に積極的に校内研修にかかわり、日常の教育実践に生きる研修を進めるために、マネジメント・サイクルを取り入れたたり、校外の各研修と校内研修を意図的に関連付けたりすることを中心に提案した。

マネジメント・サイクルを取り入れた校内研修の推進とは、校内研修の目標・計画(Plan)の設定から、確実な実践(D), 客観的な分析に基づく評価(Check), 改善(Action)のサイクルに従って、校内研修の進め方を見直すことであり、校内研修の充実を図りながら教師一人一人の資質向上を目指すものである。

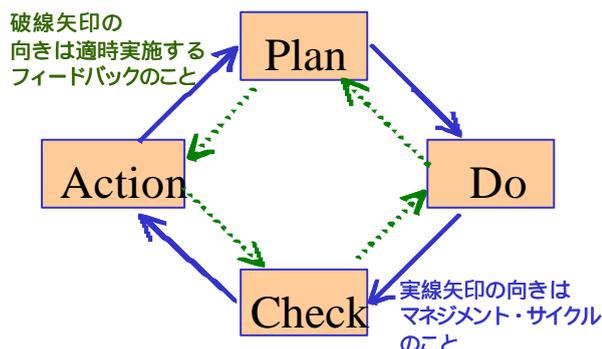


図 マネジメントサイクル

そこで、本稿においては学校の実態を生かした校内研修を推進している事例を紹介しながら、日常の教育実践に生きる校内研修の進め方を述べる。

1 校内研修を計画する段階

校内研修を充実するため、研修係は全教職員で課題を共通理解したり、授業を通じた研修を実践したりすることなどを計画段階から意識し、教職員全体に継続的に啓発することが大事である。

(1) 自己課題の意識化

多くの学校で、課題を見いだすための方策が工夫・実践されている。よく用いられる方法は、アンケートを行って教職員の思いや願いなどを把握し、そこから課題を見付け、計画を立案して課題解決のために共通実践を行うというものである。しかし、課題が一般的過ぎたり大き過ぎたりするため、教職員一人一人の課題として意識されにくい場合もある。こういった問題を解決するためにU中学校では、次年度の教育課程編成前に、教職員だけではなく保護者、生徒にもアンケートを実施した。そのアンケートの結果について職員会議で話し合い、生徒や保護者から最も多く出された「分かる授業」を自校の課題とした。それを受けて校内研

修では、「小中連携に関する研修」，「授業を通した研修」を中心に行うことになった。「分かる授業」を学校の課題として意識した教職員は自分の課題として認識し，研究授業などが主体的に実施されるようになった。アンケートを通して，教職員が保護者や生徒の思いや願いを知り，解決すべき課題が何かを一人一人認識したことにより，教職員自らが課題解決のために共通実践を行ったのである。

また，講師の招へいや小学校との合同研究授業を計画したことで，教職員一人一人が課題を意識し，課題解決に対する意欲が高まったことが分かる。

(2) 研究授業を通した校内研修の推進

授業を通した校内研修は，単に授業を見ただけで終わらすことなく，指導法の改善や研究仮説の検証など，課題解決のための有効な手だてとして進めていく必要がある。

D小学校は全員で授業を提供し合い，課題の解決に取り組んでいる。前年度の研修について，自己評価と相互評価を行い，その検証結果を基に本年度の研修テーマや研修計画を考えた。授業を通した指導法の改善や情報交換などを，教育課程全体で考え，繰り返し研究授業を実施し，意見交換を日常的に行った。そのような環境によって，教師一人一人の負担感が増すのではなく，無理なく自然に課題追究が行える環境を整備しようと，以下の手順で取り組んだ。

学校全体の研究テーマの設定

「一人一人に応じて確かな学力を身に付けさせるための指導の在り方」

個人テーマの設定

指導法の改善に関する個人テーマを設定する。

視点を設けた授業研究

共通課題である指導法の改善に向け以下のような研究の視点を設け，研究授業を通した研修に取り組む。

《視点1》

授業で実践し，日常的に指導法の改善を考える。

研究授業や毎日の授業で，改善策を練る。授業の振り返りや学習の評価については，校内研修の時間だけでなく，毎週行われている学年部会などでも行う。

《視点2》

評価を複数の教職員で実施する。

日常の学習の評価を，養護教諭や加配教職員が副担任としてかわり，記録を基に的確に評価し，指導法改善のための情報にする。

《視点3》

学習環境を整備し，指導法の改善を効果的に進める。

教室設営や発表話型，学習の準備，学習のしつけなども，全員で共通実践できるように工夫する。子どもたちは学年が変わっても戸惑わず，学習効果を上げることができる。

校内研修の計画段階において，研修の体制や進め方を検討する前に，教育課程

全体を見直すことから始めたのも、D小学校の熱意の表れである。校内研修の動きを日常の教育活動と関係付け、教育課題の改善を校時表の変更や業間の内容の見直しなどと併せて実施した。D小学校では、このような実践の繰り返しにより、子どもたちのC R Tの結果は向上し、毎時間の学習活動への取組も積極的になった。さらに、子どもの変容から、保護者や地域の人たちが、学校の姿勢を高く評価するようになった。そして、教師たちも自分たちの指導や取組に自信をもち、指導技術の高まりを実感することができるようになった。

2 実践する段階

校内研修が日々の教育活動において更に生かされるためには、計画も実践を通して修正されることが大切である。授業研究で出された意見について、次の研究授業などで改善策として提案するよう計画を変更したり、実践しても課題が明確にならない場合、以後の計画を変更したりするなど、柔

軟に対応することも求められる。また、全体のテーマで実施された研究授業の結果を基に、個人の研究を展開し、課題解決をねらう例もある。

I小学校では、全体の研究テーマ「基礎的・基本的内容の確かな定着を図るためのきめ細かな指導はどうあればよいか」に対して、例えば、「基礎的・基本的内容の定着を図るための理科指導はどうあればよいか」といった個人研究テーマと関連をもたせ、校内研修を進めている。全体の研究主題を設定することで研究の深まりを期待し、学年や教科、個人ごとに得意分野で視野を広くし、研究推進を図ろうとしたものである。適時にフィードバック、フィードフォワードを行って実践を見直し、内容が更に具体的になるように計画を修正するようにするなど、より日常の教育実践に生きる研修を推進するよう考えられている。下の表は研修計画であるが、全体と個人の関連を考慮した実践の進め方が見て取れる。全体で行われる研究授業の少ないところを個人の研修で補完している。

表 研究班・教科部ごとの課題と個人研究の関連を考慮した実践の進め方

月	日	曜	区分	テーマ研修	一般・個人研修等
4	16	金	係会	研修計画の共通理解	一般研修（以下 一般） ・・・希望調査・計画決定 個人研修（以下 個人） ・・・研究テーマ、仮説、内容決定
	26	月	テーマ他	研究授業学年の決定	
	28	水	テーマ	研究誌作成内容についての共通理解 公開研究授業単元・指導形態等の決定 C R T結果分析と重点指導単元設定	
5	17	月	テーマ	評価計画の完全作成（連休明け）	一般・・・生活・保健指導上特に手立てを要する児童についての情報交換(24日) 個人・・・検証、データ収集
	24	月	一般	研究授業（4年 算数）	
	26	水	テーマ 研究授業	研究誌執筆分担と内容検討 公開までの諸準備内容・分担決定 補充・発展教材の作成	
	2	水	〃	研究授業（2年 国語）	個人・・・検証、データ収集
	7	月	〃	研究誌原稿の作成	
	27	火	テーマ	補充・発展教材の作成	

（I小学校年間研修計画から引用）

3 評価する段階

教育課題解決のために計画を立て、実践を重ね、よりよい方策を求めるなどの改善を図るためには、評価の観点を明らかにし、評価規準を定めておくことが大切になる。研究授業の参加者が、授業のねらいや指導方法、学習評価の観点、時期、方法、学習の遅れがちな子どもへの手だて、学習の理解が早く、発展的な内容を学ぶことが必要になる子どもへの対応の仕方などを、できるだけ具体的にとらえて臨むことが、確実に研修を進めることにつながる。

S小学校では、授業前に研修係が授業参観での役割を分担し、参観の視点などを示して、その研究授業の研究での位置付けが明確になるようにして、参観に臨むようにしている。

S小学校 校内研修会 【道徳】	
<主題名>	家族の一員ならば 資料「お母さんのせいきゅう書」 4年 男子13人 女子17人 計30人
<指導者>	教諭
<日程>	平成16年6月14日(月)
	研究授業 14:10~15:10 教室
	授業研究 15:30~16:45 教職員室
	校長指導 16:45~16:55 教職員室
<授業研究会順>	
	授業者反省 (5)
	質疑応答 (15)
	研究討議 (55)
<役割分担>	
	司会 ・記録
	授業記録
	KJ法 ××
	写真
<研究討議の柱>	
	子供たちがこれまでの自分をふりかえりながら、主体的に考えていくことができる道徳の授業のあり方はどうあればよいか。
	子供が自分の姿と向かい合いながら、豊かな心情をばぐくんでいくようにする教師の支援は、どうあればよいか。

また、授業研究の結果をまとめたり、今後の研究の方向性を確認するため、研修便りを発行したりして、評価の後の共

通実践を積極的に推進している。

4 次の計画を意識した改善の段階

マネジメント・サイクルの視点に立った授業改善を行うときは、検証可能な達成目標(研究仮説)を設定する。そのことにより、何がどのような状態になったときに、目標が達成されたと判断するのかを明確にすることができる。また、次なる実践に向けて行動を起こすときに、何より具体的な方向性を見付けやすい。

T小学校は小規模校であるが、研究推進委員会を置いて校内研修を進めている。掛け声だけに終わらない実践的な校内研修を実施しようと、体験活動研究班と必達目標研究班のどちらかに属し、必達目標(目標を数字で表し達成を目指したものを)掲げ、毎年度研修テーマが連続する活動と工夫を繰り返している。

5 まとめ

各学校においては、置かれている条件がそれぞれ異なるため、校内研修の進め方などにも苦慮されていることと思われる。しかしながら、学校や子どもたちの状況、願いなどを的確に把握し、それぞれの教育課題を校内研修によって解決しようと工夫したとき、各学校における独自の形が現れ、課題も少しずつ解決されていくと考える。今後、各学校の更なる工夫と実践を期待する。

(教職研修課)